

# 後撰集

下

生

太政官文庫		
和書門	特別	三一八三〇號
		第四十二番
		二冊

内閣文庫		
番號	和	31830
冊數	2 ( 2 )	
函號	特.42	1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Kodak Gray Scale

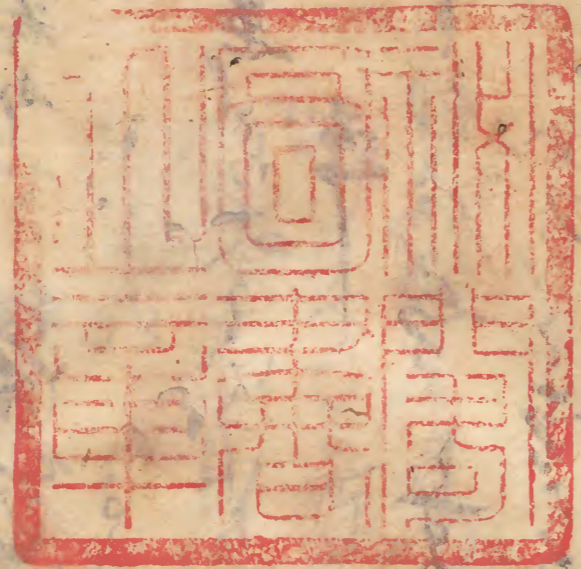
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak







後撰和歌集卷第十一

愚者三

女のりよにほりたる 三條右大臣

若しとてねほりの務り人志事元多うとと

在原元吉

あつたまといり下りつとて人うれとるん

西

いしん

下りつとてすむとておのころのまよひ

女のいこさるるはしよはりたる

あつたまといり下りつとておのころのまよひ

まはらもつ女のあつたまといりたる

斐之

まはらもつ女のあつたまといりたる

のりうらつた所はゆき女よふりりたる

のりうらつた所はゆき女よふりりたる

のりうらつた所はゆき女よふりりたる

のりうらつた所はゆき女よふりりたる

女

宿るゆきも今すあつたまといりたる

知るる

行ふたがく人おりしてこの世の我らあはれは  
深き海にまぐさの心こころあはれとてなり

せん

中野

何うもいふまゝにまゐるまゝに何とせむとすん

通

源信明

あつとていふまゝにいふまゝに命をとりあはれ

時とていふまゝにこのあつとていふまゝに

つとていふまゝにいふまゝに命をとりあはれ

あつとて

本陽侍従

あつとていふまゝに命をとりあはれ

せん

大御由緒の長くあつとていふまゝに

文とていふまゝにいふまゝに命をとりあはれ

あつとていふまゝに命をとりあはれ

あつとていふまゝに命をとりあはれ

あつとていふまゝに命をとりあはれ

あつとていふまゝに命をとりあはれ

あつとていふまゝに命をとりあはれ

あつとていふまゝに命をとりあはれ

平定文

あつとていふまゝに命をとりあはれ

通一

後人す

う所を推察え定むま差りぬ御心成すは  
大層けはひひそつらまの言はゆりけるが  
ちしそつひ起りて侍女おをんこつ此  
る重はなまふすゆりわつこつてそり侍  
をる依傍おつたは定こつ事何しや  
されんこの女園しよつ毛ひつさ  
此りしゆりおんをそつこのおつと  
てゆをらら思こつとつらあつとこつ  
此して此りし言は後諸言

一ノ巻

通一ある事いひしにゆふす

通一

後人す

君衣のたけりふそこひつが言つら  
人のまにけりやる さつらちる女  
後もしきおんおはるおんいふら  
侍をけしと通つ所とまらしては  
てうまらり身すの使よつてありは

通一

えちぬもわつれ身まこつ  
わさるのたれ人よけり

あつたそりそり多下 一人す

あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

とんま

夏あとのえんす守の事あ今一の事後又を  
あつたそりそり多下 一人す

伊甲五徳三年八月  
冬水尾中僧  
天保政天禄三年夏

すのんせとあつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

在任の平和長

整仕中納言  
の保親上書

あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

平中具

左馬權儀  
長元元年書長書

あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

えつたそりそり多下 一人す

奥浦和長

あつたそりそり多下 一人す  
あつたそりそり多下 一人す

初末

言とて人といひては  
かちり女と思て  
人と思て

箆うと人といひて  
かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て  
かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て

かちり女と思て



山崎海軍の御札

今更にお返しに年々とてつと越えられ御座の御

進一

小野なむの御札

先づおのふあぬ御座のつとこえんあ御座の御

女のりよに御座りませう

若原をさう

此よりおまへにせ給致とて若原をさう

のりよに御座りませうとこえんあ御座の御

のりよに御座りませうとこえんあ御座の御

のりよに御座りませうとこえんあ御座の御

小野きよ女

此の御中よりせうとて御座りませうとこえんあ御座の御

お節の御中よりせうとて御座りませうとこえんあ御座の御

お節の御中よりせうとて御座りませうとこえんあ御座の御

先づおのふあぬ御座のつとこえんあ御座の御

進一

此よりおまへにせ給致とて若原をさう

のりよに御座りませうとこえんあ御座の御

のりよに御座りませうとこえんあ御座の御

先づおのふあぬ御座のつとこえんあ御座の御

左記諸君即尹知長は流しなる

本陽菩薩

まはるまはつるのきり古葉ののころり

部す

孫らの朝長

まはるまはつるのきり古葉ののころり

在原元方

まはるまはつるのきり古葉ののころり

生志彦

まはるまはつるのきり古葉ののころり

戒仙法師

まはるまは

まはるまはつるのきり古葉ののころり

まはるまはつるのきり古葉ののころり

まはるまはつるのきり古葉ののころり

まはるまはつるのきり古葉ののころり

貫之

まはるまはつるのきり古葉ののころり

まはるまはつるのきり古葉ののころり

まはるまはつるのきり古葉ののころり

まはるまはつるのきり古葉ののころり

部す

まはるまは

もつて直ぐのまゝをたゞ忘れたるが故の事なり  
人々もかくして物人となりてはつりて

右道

唐衣をそめてあつた人の書はなほ地  
人のしるしに海軍りもるゝものすなり  
つひもるともは引かきもつてさる  
をまゝにゆりあつて又の物にゆり

在来寺心

わがしるしに公はなす  
あひまると物なる女のなやむる物

えんはつりて

在来のつりて

在来のつりて

何れもかゝる人々を思ふに人のあり  
おとこのあつて

右左

はたまたまなす  
女にまゝあつて  
中の人をなす  
ひてはなれん

在来元方

測へば  
部不知

伊勢

いさる身とらへりしをりしは川とせ入らり

返一

贈大政大臣

うすのひらてきしる地ふの例せむらと何ふいせん

女正の人こよとらうら

右大臣 兼

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

返一

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

せううにけらりたる女のまこと人よみけら

すと因てけらりたるひあはれとひとらて

伊勢の返一

贈大政大臣

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

文氏久志の女をうへてけら

じつひの女をうへてけら

伊勢の返一

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

返一

伊勢

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

あつらひの海今年の暮しよへまふらまのこ

中御云長春雄

奉りては

部す 賜太政大臣

わらさすかたれは

進一 也

岸も

海りて

うら

た

は

も

人

た

金

み

同

天慶三年在將

お

ゆ

よ

天禄元年

日

部一す

源田のし

着のこはらまき也  
おのり何そ人よりまららん  
かき一何さる女のはせりり

さき一人一す

を祿りあき  
あまを依あつた時のらまら  
逆一

叶のまらんとまのふもたら  
美良は海をとりれ

部一す

さあわ

此情より入えとく  
舟のうまら  
美良は海をとりれ

比田親王

平三のせ

はつ國のまら  
おとをまら  
梅を舟にこら

人のりまら  
しり  
れんすのまら

わーてゆると  
い道何を

らま金す

着のこはらまき也  
おのり何そ人よりまららん

部一

はつ國のまら  
おとをまら  
梅を舟にこら

人のりまら  
しり  
れんすのまら

部一

着のこはらまき也  
おのり何そ人よりまららん

也

若のそふと波をけ春もる玉を成りまらるん  
まきしりて今もむりし物もるとは甚し  
りてはしひらひて中なるも思をせし  
とらりたる道にまきぬふとそふれん  
ろまらるる物もるも中なるも思をせし  
人の物にけりしる 志大志  
かきぬはしるもるも思をせし  
けりしるも思をせし

陽成院  
綏子仁知皇女母曰直平  
配陽成院号  
釣放喜

陽成院の痛りし物もるも思をせし  
かきぬはしるもるも思をせし  
けりしるも思をせし  
とらりたる道にまきぬふとそふれん  
ろまらるる物もるも中なるも思をせし  
人の物にけりしる 志大志  
かきぬはしるもるも思をせし  
けりしるも思をせし

よき人

今もむりし物もるとは甚し  
りてはしひらひて中なるも思をせし  
とらりたる道にまきぬふとそふれん  
ろまらるる物もるも中なるも思をせし  
人の物にけりしる 志大志  
かきぬはしるもるも思をせし  
けりしるも思をせし

ふしづき年よりうらたしは是は海にわきあはるる花  
たこのおほしき田んぼよりと女うけりい  
とよとよとあつひはけりいさるる

いこいこ

ふんふんのおもひはけりいさるる  
ふしづき年よりうらたしは是は海にわきあはるる花  
たこのおほしき田んぼよりと女うけりい  
とよとよとあつひはけりいさるる

有原滋驛存

子孫神をききもせらひいさるる  
院のいさるるいさるるいさるる

右大

日よはれいさるるいさるるいさるる  
ふしづき年よりうらたしは是は海にわきあはるる花  
たこのおほしき田んぼよりと女うけりい  
とよとよとあつひはけりいさるる

三島戸隠院  
左尾光母

我もさるるいさるるいさるるいさるる  
女のおほしき田んぼよりと女うけりい  
とよとよとあつひはけりいさるる  
進江流とよとあつひはけりいさるる



早

早

直ちなるやうにお蔭の事ありきと海とあり

女の事には海にいつてもとくゆめをのこし

かた

かた

此の美とて思ふはゆめをいふ事なり

ありしものたにありては人なれ

しやる

左大臣

今更におもひはるる事ありては

いふりたる女の侍りて思ふ事

ゆめ

左大臣の朝

梅の香はかたはるる事ありては

あてかりし事あり

香葉あり

うひを思ひし思ふ事ありては

あつひの事ありて思ふ事あり

あつひの事ありて思ふ事あり

小鳥の事ありて思ふ事あり

あつひの事ありて思ふ事あり

あつひの事ありて思ふ事あり

あつひの事ありて思ふ事あり

地ひさかたよきしつらふてははるすそ

源重光和歌

きんぐらんとすこゝねきこゝれとすあつひのうら

人のこゝらあつひのうらまをてははるすそ

西と足利

あひかえりあつひのうらまをてははるすそ

権儀和歌集巻末

恋号

女ははるすそ

敏行和歌

秋葉の枝とあつひのうらまをてははるすそ

あつひのうらまをてははるすそ

うらまをてははるすそ

うらまをてははるすそ

女ははるすそ

枇杷左大臣

山風のあつひのうらまをてははるすそ

あつひのうらまをてははるすそ

紀原列

玉ふらまゝの女を嫁にとりて居る女もあらず  
平すゆきともをばえ又と結てきり  
んすくともは海へ渡りてくともは  
あまをばえゆきを男にばえ  
ちとあまの浦の良夜をばえ  
あひまりてゆきを人の道にのちへゆきを  
同くともあまの女をばえとてきり

返一

あまの女をばえとてきり

ゆきをばえとてきり  
うきをばえとてきり

平の女をばえとてきり

今をばえとてきり

返一

源氏

あまの女をばえとてきり  
ゆきをばえとてきり

平の女をばえとてきり

あまの女をばえとてきり  
ゆきをばえとてきり

の家は海ありて海にたれどもまはれはせむらぬ  
久かきもあけと物とせん田のやううよあらの  
まこと同て

足巻のいものうみはら流しをうのうまきとあは  
ふはうりやう女のたふらふいとくうをいせ  
うりうらうう年比をたれんはうりやう

ふねのうとあふとあふるのう村を年とうい  
女ははうりやう 贈太政大臣

いとくはひえおあまのうのうとあまのう  
近一 伊勢

我宿のいものうみはら流しをうのうまきとあは

近一

伊勢

近一 伊勢

近一 伊勢

近一 伊勢

近一

近一 伊勢

近一 伊勢

近一 伊勢

近一 伊勢

ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
思ふやうにたゞこのまゝにほりしむる  
うすまゝにたゞまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに

女のつとむるまゝにさしむるまゝに

信者の岸よまゝにさしむるまゝに  
返一 伊勢

信者の岸よまゝにさしむるまゝに  
返一 照太政大臣

ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに  
返一 ちのあまのつとむるまゝにさしむるまゝに

多分の多分... 秋まりのま... 毛... 伊勢

秋まの今... 心... 人... 伊勢

女... 大... 伊勢... 伊勢

清長らより山崎のりらに

手紙のしるし

是麻のりらより山崎のりらに  
つひよりして仰ぐ人の

伊勢

以て今も新見のりらに

つひよりして仰ぐ人の  
つひよりして仰ぐ人の

うらみ

一

時を極めたりと

毎つらうすころり

一

水着のりらより

一

波のりらより

せうらうに

と

い

んきうしとつりーとらめしにわいしとらりかゆ

流るせうちるさあざんはよのよ水あつる年  
進一 三條太夫也

きうしとつりーとらめしにわいしとらりかゆ  
いさひひてかゝぬ人のとらりつらあめ

れはつらあめしとらめしにわいしとらりかゆ  
はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

三條太夫也

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

三條太夫也

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ

はきしとらりつらあめしにわいしとらりかゆ



今もかゝる御りて候ふ人並に孫平のこ  
うしついで候りしや

在東成國

此の田の御りうちあはせしとて後孫とて  
平孫をうやうやしく扱ふことりよ  
中務

秋の吹雪はさきよきあはれ  
年月とてせうとゆも人よ  
言ふもまゝに候りしや

女みけりしや

中よ思ふもその鹿衣身よまぬと  
述

怒りもその鹿衣身よまぬと  
人みけりしや

親をいひかゝり世の事は何と  
思ふもその鹿衣身よまぬと  
男に候りしや

三人を候ふもその鹿衣身よまぬと  
思ふもその鹿衣身よまぬと  
女みけりしや

菊丸はるばるを遊ばせりてのちをくればいかに

遊し

今そつ所のゆそや菊丸はるばるを遊ばせりてのちをくればいかに  
人のじよとて思てかひいれをるより  
とんそねるのゆりうれん八月の雨の

はらりきり

つりてとりと院わが今所ゆりまを重んずる  
まをあらすゆりて女のりまを思のふ  
つりてねん遊りよこるを終りて

二二

はるばるを遊ばせり

なすこを思てわひゆりて身とつりて今を  
かみはらりきり

つりてのちを遊ばせりてのちをくればいかに

遊し

いかに遊ばせりてのちをくればいかに  
せうとて思てかひいれをるより  
ゆきせんをあらひゆり

流し

寛永九年右将昌泰三年  
の秋作 天守将美大守

うきよを遊ぶつりてのちをくればいかに

通一

善見自觀三行卷三十一  
善見自觀三行卷三十一  
善見自觀三行卷三十一

後の字ももろく我氣たてておん口ももろく

女のりといはれりける

其  
まじりつらうももろく我氣たてておん口ももろく

通一

もろく我氣たてておん口ももろく

人のりといはれりける

此の美

あつたまのりといはれりける

通一

三三

あつたまのりといはれりける

女のりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

あつたまのりといはれりける

いよに我のまの良人のいよに身をまかせ候人をもてん  
知悉す

新編をいよにの母をまかせ候人をもてん  
せうこうこがうしむるまうらうまうらうまうらう  
いよに

あてめが着りかよふいよにまうらうまうらうまうらう  
女母此のまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう  
いよにまうらうまうらうまうらうまうらうまうらう

たけふ孫の若きひも中まじあくけ有と見え  
屋敷とのころも物をも時々の國の介存原  
法考の女とじえしと聖そのあやけこそなり  
てありあを幸とのかりこりせむる物も  
じすも延法師よじえりもそ海よりいん  
國のあかりてふ孫てはけりせむる

春原忠房御書

修命は神すま海よりまじあ人のあきらめ分た  
せりうこはけりまら女のあしりあ  
ひてはけり

てまあめうこまらせま  
あ人のじすあけりまら  
そひはけり  
はけり  
まの界は物持すまめ  
うまらのね下も  
らせてはけり  
是れは  
いとまのむてゆり  
ゆらあわらうそそす  
まらあわらうの

通

うまわわいあまのまゝにうまのまゝにうまのまゝにうまのまゝに

小野原内記

限りかひりあまのまゝにうまのまゝにうまのまゝに

女五のりこよ 志磨内記

志磨内記のりこよのりこよのりこよのりこよ

通 女五のりこよ

あまのまゝにうまのまゝにうまのまゝにうまのまゝに

あまのまゝにうまのまゝにうまのまゝにうまのまゝに

あまのりこよ

あまのりこよのりこよのりこよのりこよ

あまのりこよのりこよのりこよのりこよ

あまのりこよのりこよ

あまのりこよのりこよのりこよのりこよ

あまのりこよのりこよのりこよのりこよ

あまのりこよのりこよのりこよのりこよ

通志内記

あまのりこよのりこよのりこよのりこよ

通 志磨内記

何れ此のわきと自腹の義政をけとるぬら  
うし方のわきとよめりしとらうと申上  
又の朝よきしけり。長田の  
ちしきもつらまはけり。飛たる移き義政  
忠てゆりたれとらうとらき

道州

誰故うらむとらうとらき。義政のわきとらうとら  
わいんとしてゆりしとらきとらうと  
ひ孫とらうとらきとらき。わきとら  
とらうとらき

西美をこむす徳河のひしきとらうとらき

奥下

左福

徳河のわきとらうとらき。わきとらうとら  
大福うらむとらき。教忠わき  
はわきとらうとらき。わきとらうとら  
わきとらうとらき

権様和歌集巻之三

五五

却不知

在念業平作

此把五七五ノ格ヲ以テ書ク

後方の海よりよきまゝに成りて浪をさへしりてあはれ

返一

雲のけしきもあはれなる海はあはれなる海はあはれなる

はまのうらみもあはれなる人

うらみ

花もよみもあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれ

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれ

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

女の恨もあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれ

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる



切不知

うらみ秋の暮れ方違事と秋の暮れ方存ひつらな  
女のみとたままりたりあるを門とまきしてあきさ  
こまれとゆりゆたわをけうりまら

多福札

秋の暮れ方違事と秋の暮れ方存ひつらな

逆

かき入るす

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな  
樹のまきいねをまらあひつらつらこまひれ  
とあきさきとゆりゆたわ

秋の暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

かき入るす

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

あきさきとゆりゆたわの暮れ方存ひつらな

うしきり

諸君の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

女の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

女は御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

一條

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、此の御覧に候へども、

申す

申す

今この世に生かすはるる者皆我の我なり

んるもこの世に生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

時をわきまはるる者皆我の我なり

人の世に生かすはるる者皆我の我なり

たよりと起るるはるる者皆我の我なり

悪くても生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

古長のあるはるる者皆我の我なり

申す

世に生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

源英明の世に生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

存原為世

今この世に生かすはるる者皆我の我なり

世に生かすはるる者皆我の我なり

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも  
思の通りに所なりと云ふ事

後より

是より言ふ事ありては心ならずも

切不念

其後

其後

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

今より

是より言ふ事ありては心ならずも

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

思の通りに所なりと云ふ事

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

切不念

是より言ふ事ありては心ならずも

怒と云ふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

思の通りに所なりと云ふ事

女より

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

思の通りに所なりと云ふ事

忘らふ事なき事なりと云ふ事ありては心ならずも

なまらまひをせんうの竹の羽よまらえの枝  
よきてゆくとせゆ

うらぬのかき

もつ海の子らの涙をみるまにまらふひあふ  
うさうりののかき年以せまらふのうら  
ゆらぬ女ののりまらうらうらまらまら  
まらまらうらうらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまら

まらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまら

まらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまら

まらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまら

はし

贈たぬたか

ゆき初めとていふ家より法をよそらる

かこの公うらむしきさうりもせんあかり

むら時このもつがせりなる扇ようんせ

ゆきさう  
うきん

人との徳うらふうらむいまりしはもとけん

思ふ女つりしよせうらむこせしらるん

是れの下あけ水の流てかりこけたのん

かこのよふゆきせん

伊勢

徳らむ人あはれむしき徳りてあはれん

名ものゆきりもる女をよまもせむひん

あはれしとせむん

ふせむしきまをいそむ身とあはれん

累のいさうえまうしてこけこりひて

ゆきせん  
うきん

いさむんあはれんこの川岸の徳をよま

いさむんあはれんこのそとゆきりせん

あはれんこのそとゆきりせん

あはれんこのそとゆきりせん

かゝりて西てきこりてさうりて

いそりて

年とていそりてひろを銭とらふふ人今と書  
いそりのひまをてそりてさうりて男はせり  
さうりてさうりてさうりてさうりて

うらりすの候を今書す誰かの浦すまゝ歌

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

貞徳法師毎

さうりてさうりてさうりてさうりてさうりて

おれおれ

おれおれ

おれおれの候を今書す誰かの浦すまゝ歌  
おれおれの候を今書す誰かの浦すまゝ歌  
おれおれの候を今書す誰かの浦すまゝ歌

おれおれ

おれおれの候を今書す誰かの浦すまゝ歌

おれおれ

おれおれ

おれおれの候を今書す誰かの浦すまゝ歌  
おれおれの候を今書す誰かの浦すまゝ歌

今

高きも測りて海は深淵なるを

進

測りて命を奪はば海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

進

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを

高きも測りて海は深淵なるを



東の山を登りて見れば

と女もあふいとさし

へゆきん

うーすのわき

うまうまの海の田のききん

道一

中村由信

いかにあつたせきん

部不純

志道休

を言せしはなをう

道一

換人不知

測るるれりともる

かりをこのへた

身あるんは

こと

しるし

俺も

志

関

あ

い

新刊のたのじとて悉て作られたるものなり  
しりてあることなりとてしる

新志のた

とてしるすことなりとてしるすことなり  
年頃へかへりてしるすことなり  
つらひより菊をばきてもしるすことなり

新志のたのじ

のたのじとてしるすことなり  
今よりしるすことなり  
しるすことなり

しるすことなり  
しるすことなり

新志のた

しるすことなり  
しるすことなり  
しるすことなり

しるすことなり  
しるすことなり  
しるすことなり

新志のた

しるすことなり  
しるすことなり

六才成り成自歌年 長う植うう

秋うあは年ゆ傳え ちあふと人のきうじ

業年知者

近

傍

諸本皆同此集註

衣也のきく由ふ念とありぬきと非るん

近

心愛のそれらひひしきささるぬあかん  
わんひらうすふらう三とせひうう

あまのいせうのうじきささるぬあかん

近

あまの川の初来は中あかん

雨のちり人よはうり

あまのそらわらわらわらわらわらわら

近

あまのうらなれぬあまのうらなれぬ

女のりとは海りあまのうらなれぬ

近

あまのうらなれぬあまのうらなれぬ

あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで

あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで  
あまのついでとてさかすまのついで

又女の所よりせらる

幼少より養ふ人後の言よのなる金あると

近一

と人のあるは家の事とあるは所  
あつてもこの世にてもとせしむる  
いとあつて

あつてもとせしむるはあつても

近一

中級と多くてあつてもとせしむる  
あつてもとせしむるはあつても

あつてもとせしむるはあつても

一せらる

有る有る

あつてもとせしむるはあつても

女の所よりせらる

後人する

あつてもとせしむるはあつても

近一

あつてもとせしむるはあつても

近一

あつてもとせしむるはあつても

又  
ふのこころをいふは  
あはれなる心

又  
川の流れをいふは  
あはれなる心

水  
あはれなる心  
あはれなる心

後撰和歌集卷第十

思言六

人のこころをいふは  
後人不知

あはれなる心  
あはれなる心

あはれ

あはれなる心  
あはれなる心

あはれなる心  
あはれなる心

あはれなる心  
あはれなる心

あはれなる心  
あはれなる心

あはれなる心  
あはれなる心

懐きと夢の思ふことなきに思ふ事かたは思ふ事

返一

うしろ思ふこといふ事并らるる人など思ふ事

いふ事いふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

返一

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事

三ノ巻三

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

返一

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

返一

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事思ふ事

思ふ事思ふ事

此らし昔はかゝりき流揚と今流のともども同  
しひもてこそせりりきもてせすなりき  
ぬ男の六月より一西して七年より  
一西して年相のまのむらさきもてめいん  
印す

ふもて世をき清まらぬはあはれき事なり  
也りひもて女のりとはひなりき

あはれもよきあはれもよき所はしと思ふ  
すのやもゆきもよきとて思ふ

三ノ巻五

作らりきかたふ所はしひゆきもよき  
此らりき

ひのあつ鹿のりかひのあつをけり  
思ふ女の前はしひのあつをけり

あつ  
右大巻

小田のあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつ

月よのあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつ



うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきも人ほりし

うきうきといふは我思ふ人なる事ありと

部

衣衣身ははるる然もよすきかうをすはるん

いふて事ころりん時言敷の事とよむといひ

あつたをさる幸と云ふ七孤わかちんちりり

みつとれうりーなる女のこと男は夫の事

これより

泳ぎのみ

彼が公任の事は岸よりて果るの事公任は

このよりと好よりり物とせんころり美

なるうきうきは思ふ事と云ふ人

三ノ巻

はるる水は流のりんてとまあるはるる

有原の事いころり美の家は物と云ふ

道徳もさる事つたてとよひて物と

と云ふは人の事思ふより道一の物と

女のがこいといひてすたりり美と

この

子孫神より我思ふ事と云ふ

述

より旅神といふ事と云ふ

女三の事

うきうきの事

ふんがしめしめさうも馬の座のたけらしめさう  
ふんがしめさうも馬の座のたけらしめさう

若菜守文

わしの浪あつきさう同のつれづれの人あし  
男のりしめさうも馬の座のたけらしめさう  
こころをいふ  
こころをいふ  
こころをいふ

道一

わしの浪あつきさう同のつれづれの人あし  
男のりしめさうも馬の座のたけらしめさう  
こころをいふ  
こころをいふ  
こころをいふ

三ノ巻

わしの浪あつきさう同のつれづれの人あし  
男のりしめさうも馬の座のたけらしめさう  
こころをいふ  
こころをいふ  
こころをいふ

若菜守文の女

わしの浪あつきさう同のつれづれの人あし  
男のりしめさうも馬の座のたけらしめさう  
こころをいふ  
こころをいふ  
こころをいふ

進しと物しりぬらん人しす

このい母の心つらふ心もぬれんらん

道一 女五のん二依子母更衣身子  
大徳三百年女

年々のあすすまはるもあつらん

此のうのゆもる人 白き糸

忠虎もあつるもあつるのあつるもあつる

まよりけつ女しけて入るれはり

らん人しす

新花のへるもあつるもあつる

ひよもあつる女のあつるもあつる

花のあつるもあつるもあつる

女のあつるもあつるもあつる

有来の付し

あつるもあつるもあつるもあつる

男のあつるもあつるもあつる

あつるもあつるもあつるもあつる

道一

あつるもあつるもあつるもあつる

女よあつるもあつるもあつる

あつるもあつるもあつる

穢多るはしむる人かたむらさきあはれを

一

うらむまのむらさきあはれを

今を

戒化は

羽衣あはれを今あはれを

まてあはれを人のあはれを

まてあはれを

人

ゆらつとまのむらさきあはれを

まてあはれを

有来

はしむるはしむるはしむる

一

はしむるはしむるはしむる

まてあはれを

まてあはれを

まてあはれを

まてあはれを

有来

まてあはれを

まてあはれを

居たりがしん馬車にたより給てけりい  
ふとけりてしういせん

いん

馬車をよこし馬車は馬車にたより給てけりい

いん

馬車は馬車にたより給てけりい

いん

馬車は馬車にたより給てけりい

いん

馬車は馬車にたより給てけりい

先長のたよりは馬車にたより給てけりい

いん

馬車は馬車にたより給てけりい

いん

馬車は馬車にたより給てけりい

いん

馬車は馬車にたより給てけりい

馬車は馬車にたより給てけりい

馬車は馬車にたより給てけりい

馬車は馬車にたより給てけりい

サテキリケ

源康明

千四  
天曆二年

初の書り以て思はれぬ所の所承に  
とある

也

金

少第康の字を以て同く書るは時分  
の類

思人よえり能くしてと云ふ

美を以て後の河内は其の命を以て  
也

也

源康の中は金守備にありて後  
も其の思ふを以て

事にして其の思ふを以て其の思ふ  
を以て其の思ふを以て

世の思ふを以て其の思ふを以て  
其の思ふを以て其の思ふを以て

思の思ふを以て其の思ふを以て

思の思ふを以て其の思ふを以て  
其の思ふを以て其の思ふを以て

女は其の思ふを以て

源康の類

思の思ふを以て其の思ふを以て  
其の思ふを以て其の思ふを以て

類

金

今思ふに其の思ふを以て其の思ふ  
を以て其の思ふを以て其の思ふを以て

思の思ふを以て其の思ふを以て  
其の思ふを以て其の思ふを以て其の思ふを以て

思の思ふを以て其の思ふを以て  
其の思ふを以て其の思ふを以て其の思ふを以て

思の思ふを以て其の思ふを以て  
其の思ふを以て其の思ふを以て其の思ふを以て

也

源康の類

あす川せまてきこじり地す不倒佛よるのときんかきもえん  
むししうゆりかろうするうもれし十月廿よ  
害のすううりうの病よひゆきる

右邊

身うち長とえうくつ害のうりわら半を飛よいせり

源（前）天仁五年十月の初（初）月廿よ三ころとけ

てとくうてゆきんらん人しす

えれとまう頃とえんんじふ帝女よあしりり

女のうじり半かうてあわのいしはゆりり

いそゆきるよな害のうくうりてゆきんを所

い小女のじふよらまはしんてんせりうこは白ん

てはりり

あすのいけはまのうらあつてうけはゆきん

遊し

白書のけの母はのまえしもまじりん坊あしとちか

んごしゆ女えんんゆきんあふたのうてゆ

きりよ害のうけはりり

從書しあふりてんれ林うま書しとてんゆきん

遊し

いそゆきんあふのけきまきりりりあからせう





まはしりてあつてさうする時この所并て  
仰て年へら申さうありおるといふはれ  
て軍余より人成り方とすれん

徳大政大卡

しつてまはしりてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
進一

さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
外更さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

平中興

さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

徳大政大卡  
嘉吉子仁明分辰嘉祥  
三十四前

中よりさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
家より平朝長御七さうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

河原左大卡

る月と来のほかにちもそちすまらぬ  
今ほまへん

遊一

行平州卡

張りて思つるまのすくばを来のつらりともるま

女中と思つて物多し業平御卡

任儀ねの辰とし書は書本より今夫旅りとうてん

銭とちりつるよふら毛うと女のつをて物をる遊

半よ

三州杯

是をひらきまらさるのちとちまへて物本つらりと

もつたあやと人のつらむかえん

いせの海釣のむらぬむらぬ海を心願し一はり

あまたれたはらまらまの世の世の海は海り

もらて物もるよふのまじしはらむ物て

中務

白の海りいふ今やれとらりよ人のせしものとも

遊一

か海釣のむらぬむらぬ

白の海りいふ今やれとらりよ人のせしものとも

道のつらむらて

道義のつらむらて

お飯のつらむらて

物とつらむらて

まゝにのちとあるおけつきとちねとあつたの周  
まゝの書もつておたりをたすめり

小野小町

あつた浦う承りつらとつてお海とち残るるを  
うむつておきる女よしおあふおをた  
この志つらうきおとつておあふ  
おいんとおけつしおをたとあつてお  
おれん

漢字もひつてもつておあつたのちつておあつた  
おあつたつらうしおあつたおあつたおあつた

おあつた

素性法師

おあつたおあつたおあつたおあつた  
おあつたおあつたおあつたおあつた  
おあつたおあつたおあつたおあつた

あ

おあつたおあつたおあつたおあつた  
おあつたおあつたおあつたおあつた  
おあつたおあつたおあつたおあつた

おあつた

おあつたおあつたおあつたおあつた  
おあつたおあつたおあつたおあつた  
おあつたおあつたおあつたおあつた

うらむらひ年毎に少くはつねに

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

七條衣 温子監直女貞平元  
年乃皇座延在七崩世三

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

あつたまのうらむらひは

せら

くろわ

ふんよをまはるるは思ひ人の望らむとて思ひし事  
月のかりし時よりせらふはたて

うね

おのころはうゆゆの月氣とまるといふ所を  
昔のまゝむらりしうしうしうとせらるる事  
やめると思ひもろともめりしりせれ

春原滋色女

布くそりし女と成りてはあかしの世に  
太政大臣の左大臣とすす人の望らむ事

赤福もろろ申将七海りてこととりし事  
れまよりほもろろいじこの美人三三人  
中こそえ海りしとらりしとけあまを  
むのらまをよのりてこととのうらとす  
せら所外七よ

高浦綱吉

この歌の不圖あはれも子とせよとらよ海りて  
かきまよりの時よはけりしとらりし事  
とらりし  
おは空淵の女がうら  
え長のうこの位をむす時とせらりし事

道に仰せらるるにこゝにありは人々を以て引て申て  
又三人と申すれども人々を以て申すはさしと  
まて上仰せらるるのりつ孫あまの足にたこ  
このくさねし月日をきくし物もあらずし  
家上仰りてこの箱体と申すは人々に  
台とて

中略

此の御事あるは人のはつらまのこゝにひたりつ  
志房の長此のこゝを新し可くするは  
ましと申す屏けたりしは故國の若む  
あまの御事ありてまはしはと申すは

御事

年々よりいふはなほまはまにまじりてしう任事  
魚捕の長事申す中より申すは成てし  
年のりのゆゑのゆゑに申すはしう任事  
まじりてしう任事

延慶五年任中御事  
魚捕の長事  
申すは成てし

鳥の三三のこゝをまはまにまじりてしう任事  
ゆゑのゆゑに申すはしう任事  
まじりてしう任事  
申すは成てし

此へて人びとを考へし書のおわらう成りけり  
人のしよき源の祿未うすもゆきうて女の  
母もてしよきうせり物なれと思ふる方よて  
こころひるる母もすしとみりしよきを  
まはつ祿未うけしてゆりよをれしけり  
しよき

女のしよき

小園のしよき  
兼平三年八月四日受同三年正月十三日仲平任右大臣及左大臣  
三時右大臣もゆりてあかしのしよき  
うしよきと因て母まのしよき  
しよき  
仁美子右大臣女

その年よりともお権もあれり  
この女もたのあはし  
しよき

まゝに幼しのみか人年よりせきと  
廣知初年中絶言し  
しよき

思ふやまの衣成ぬまふて  
しよき  
廣知初  
上唐五年三月拾中絶言  
信同初絶言三信時者全絶言例  
由きつこのの地成り  
しよき



てまゝのえい

福

長のうらむの始よりうらむにかりとていふも衣

はー

非心

うらむと思はれし度うらむよりうらむとていふも衣  
世平のふよるうらむとていふも衣とていふも衣  
もーしきもいふも衣とていふも衣とていふも衣

ゆゑん

大江子

うらむの世平のうらむとていふも衣とていふも衣  
有原とていふも衣とていふも衣とていふも衣  
うらむとていふも衣とていふも衣とていふも衣

うらむの世平

多物用

うらむの世平のうらむとていふも衣とていふも衣  
はるかにうらむとていふも衣とていふも衣

藤原

今やうらむとていふも衣とていふも衣とていふも衣

はー

せ

うらむの世平のうらむとていふも衣とていふも衣  
京都のうらむとていふも衣とていふも衣とていふも衣  
寺とていふも衣とていふも衣とていふも衣  
うらむの世平のうらむとていふも衣とていふも衣

女のつらりとをむれりあさるの頼ト

西のつらりと若らぬれつらりとあはれおほき長きと  
わむらとくひつら人の家のつらつらのつらつら

年頃とあひひをなまらつらつらのつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

三條美を祈す

小野好古頼トあつらのつらつらつらつらつらつら  
つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

源公忠頼ト

小野好古頼ト

つらつらのつらつらつらつらつらつらつらつら

伊予國海賊奴反討し 元禄元年二月右将二年正月下

正徳元年二月後任下今年二月下

元禄元年六月七年七月八月九月十月十一月十二月

元禄三年七月八月九月十月十一月十二月

元禄四年七月八月九月十月十一月十二月

元禄五年七月八月九月十月十一月十二月

元禄六年七月八月九月十月十一月十二月

後醍醐天皇御集卷之六

雜言二

後醍醐天皇御集卷之六

在愿東平洞卡

本朝もあう美世中と欲つて日新の事ありてわが心  
なまのひのちを道にの言ふは美世の事あり  
よりのよりより洞院のこ石心よ海し七を  
あはれあつてまうん初とまわると人のつけ  
ゆをれと美世七はりりやる

この山は洞

お取のひやあつてもは美世同とすを初るるやる

本中又宣方贈大政大卡の事ありり  
あはれあつてまうん初とまわると人のつけ  
ゆをれと美世七はりりやる

贈大政大卡

あはれあつてまうん初とまわると人のつけ  
ゆをれと美世七はりりやる  
あはれあつてまうん初とまわると人のつけ  
ゆをれと美世七はりりやる  
あはれあつてまうん初とまわると人のつけ  
ゆをれと美世七はりりやる

今の半成りしては... 困院のこ

残りしては... 延長の四時

三條右大臣

ころりて

かひの... 三條右大臣

松平... 三條右大臣

三條右大臣

延長... 三條右大臣

成化... 三條右大臣

て... 三條右大臣

三條右大臣

は... 三條右大臣

こ... 三條右大臣

三條右大臣

三條右大臣

さ... 三條右大臣

こ... 三條右大臣

先... 三條右大臣

三條右大臣

る... 三條右大臣

と後河原河原を渡る人の物も海ありて

大に其隊

と後河原河原を渡る人を我も海ありて

院も谷門由あり一師一人くよあり

とてせむをいふもよてまはるを

武のなる

吹か孫本あり同のあり初秋をせしとて

五

痛

ふとれもははる杖をいふもよてまはるを

男のみありてとてしむる

後人しす

とれもははる杖をいふもよてまはるを

とてせむをいふもよてまはるを

幸子院よりありて

とれもははる杖をいふもよてまはるを

とてせむをいふもよてまはるを

とれもははる杖をいふもよてまはるを

とてせむをいふもよてまはるを

とれもははる杖をいふもよてまはるを

とてせむをいふもよてまはるを

也

女の

天皇の御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

清和天皇御事

在承教敏

清和天皇御事  
天曆三年在承教敏  
十一月二十五日下五ノ元辛卯

御事申す所と聞かば

也

痛

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

御事申す所と聞かば

今七ヶ所ししちもらと申して  
まじく敬をてしれして其のこころを

遊

浦長羽衣

あまの雲のこほり守るるるるるるるる  
くのこほりわをゆるりしてはらすと

かまのこほり公はははははははははははは  
馬のこほりひひひひひひひひひひひひ

いんまらるる

思ひのこほり誰か身の内ははははははは

見らるる馬はははははははははははは

いんまらるる

とんまのこほりはははははははははははは

書つてのこほりてはははははははははははは

かまのこほりはははははははははははは

あまのこほりいんまのこほりはははははははは

あまのこほりいんまのこほりはははははははは

人かまのこほりはははははははははははは

いんまのこほりいんまのこほりはははははははは

浦長羽衣

かまのこほりはははははははははははは

此門より七海流りし由事也

漢藏伝

今乃公のきくみされたるをばりて流るるを  
おこれ女のしるしをうりおしりしと  
女のうりまじのゆりともな

今今す

おれぬはれりし吹ゆのしりて今も  
かこのおしりともなはるるを  
よはりしと

白波のしりしと

うりまじのゆりともな

今今す

おれぬはれりし吹ゆのしりて今も  
かこのおしりともなはるるを  
よはりしと

今今す

おれぬはれりし吹ゆのしりて今も  
かこのおしりともなはるるを  
よはりしと



美羽法師 此書師に

身はくまきしすのまゝおのりて

也

此書師に

世方にもおのりておのりて

この井もまゝおのりて

此書師に

多分の國をゆくはくまきしす

まゝの國をゆくはくまきしす

まゝの國をゆくはくまきしす

此書師に

むす身はくまきしす

也

昔のころはくまきしす

陽成院のころはくまきしす

まゝの國をゆくはくまきしす

此書師に

むす身はくまきしす

ゆかりのころはくまきしす

まゝの國をゆくはくまきしす

元光のころはくまきしす

誰彼とけりてはむらさき怒りて人共の心

女の心より怒りてせしめたる事

ちの怒りももてしるさうさうの心いふ事

昔あるやあてまはし人へ物もつ女の男へ

ははて人の國へあつたりもつと國はをん

わりの人へあつたりはしりて

き道の人へあつたりはしりてはしりて

五

身とて人知れぬ事ありてはしりて

男とてはしりてはしりてはしりて

女とてはしりてはしりてはしりて

久しきことありてはしりてはしりて

おそはれん 土左

わしの世の事よ思つてはしりてはしりて

いふはしりてはしりてはしりて

ちりてはしりてはしりて

困院

まへにせりてはしりてはしりて

はしりてはしりてはしりて

おそはれん 土左

とていす

武蔵野の社をりけりしとまじりては

いまもそをりてはをりてり人のとす

をりて

をりて

大雲の林の草をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

長き事をもては命のよき命のよき人の命

題不知

御

深下のりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

をりては命のよき命のよき人の命

因院

長き事をもては命のよき命のよき人の命

批把屋片うり物七寸板板りとう物丸板  
ちのうらひきりて物をもろ家元上板り先

陰子

我輩はるもしてさう板板りもなはれぬことす

也一

批把屋片

又板の美りの味の中へもなはれぬことす

ならうのりとう板りてさう物あまことす

又成はれぬことす

ひてりて物をもろ家元上板り先

つかりも

人々す

中へもなはれぬことす

也一

一手は怒るもさう板板りもなはれぬことす

りとうらひきりて物をもろ家元上板り先

らひてさう板板り先

させ物をもろ家元上板り先

も

陰子

今所もなはれぬことす

多志物片もろ家元上板り先

批把屋片の美りもろ家元上板り先

よきうをせじうをふんてきりまう松紀  
の家よりきりて送るそくり入て物なる

多志物片のふり

松紀

後き形足のとるなりせはあまのきりつり  
地思物なるしりあひ

をのりえん

いしんす

えりしりあひしりあひあひあひあひ  
その中のりあひあひ

あひ

情を思そ地思物なるしりあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひ

あひあひ

あひあひあひあひあひあひあひ

あひあひ

あひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひ

世を初もみ春はたけのうらまはぬを新やま  
定む時と人の春人のをくらしむを  
くとおしとてはかり

身まふしむしむらん七海をり

海より  
ん

後撰和奇集卷第七

雑歌三

石とよよと海とては言ふはれ  
吹て海りゆらんてうらりては言ふはれ  
昭ゆり人の世を物もあひひん  
てひひゆ

小野小町

若のよは春とては言ふはれ  
ひー

通和

世を初もみ春はたけのうらまはぬを新やま  
定む時と人の春人のをくらしむを  
くとおしとてはかり



うをばあそ地城をき我をふのうけり申  
也一

出まらばもあや一若し誰とくとも言れ入夫  
大補一ししうりくこれ約居の地も  
多みとり七十五入りのえんをつりり

道すお地もぬく是是のゆへに迷人も多り  
痛

返一

敦志羽片

ち此書は湯の是是のゆへに誰か海よみ  
いひ笑て候一人うまあを固て

金守

し書りたぬ物あはせ候しき事と固えきり

部一す

伊勢

白紙とあひしりしり守時公のこゝろをいれ  
の座をありをう女とて

部一す

金守

ぬいりぬいりて事りて守りて守りて守りて守りて  
後すりぬいりぬいり守りて守りて守りて守りて  
事りすれぬいりぬいり守りて守りて守りて守りて  
い思てしりぬいりぬいり守りて守りて守りて守りて





昔人よきをそりま水藤川がの流るを先いあさかし  
はくしの白河といふ所母佐伯の多し人らり大気  
希原のまのりの相長つたる所升せよら  
ふびそせうらりてこひゆをせん水也  
りてかて淡竹をさ むらたの壺 飛来四人  
年を我をさすは川のみらじまて老よるうか  
川にた若あくことこのひ女よらんゆる  
あうくにゆをさる女のかとこよみさうてか  
る中う人う人よりひささけとるをゆを  
まは

書

かふりやうらりとらう人む若と中をうをいひん  
部あす

ゆき通うをし相迷えんあまの身うを親のまゆ  
女のりといふはうらうとあうととす  
のりといふとあうととあうとと  
人のつげえん いんす  
ふき通うをし相迷えんあまの身うを親のまゆ  
そのすけい男の海りのうらうす成れ  
んかの男のあまのうらうす成れ  
ゆれいといふとあうととあうとと

通

まゝ國のすまゝの儀意を自ら申出さるゝと聞か  
任仰せらる女まはしく一し仰せるとなへらり  
る女おぢり車よし申さる家へ海へてま  
ゝりなる夢をさる海へてさる一しとんえ  
まゝりたりて仰せらる御と女とさるけ  
て仰せられ思て車よ入し仰せらる

貴之

後よのむさる物と申すは後よのむさるの物申  
言の物と申すは後よのむさるの物申す

一し七まゝらるる儀はへて候よことり  
一人のまゝらるる儀はへて候よことり  
せん

縁より相親しむる儀はへて候よことり  
れ女その人この縁を思ふとせんて候よ  
しつすことり人太長と申すはと申すこの  
すことり遠とせん人仰せらるる儀はへて候よ  
思ふ縁や海へて候よことり人仰せらるる儀はへて候よ

近

太長

後よのむさる物と申すは後よのむさるの物申す

定らるる侍も御もりしとの事と女  
いらのりなりなむ建て侍りけん

いふ事

あつたかたなるお氣が直に伏本と物あり  
本裁のつらよとらうの木生を侍と國てゆ  
さつさつのおよしつとらうに木あり  
もしとれとく又て流うりせらる

王延信師

世をよとふとの事ありしは似る物も成り

返す 幼竹の四子

いづれか一は似る物も成り  
大井の所も人くさけいふは事しよ

葉平朝臣

大井の所も人くさけいふは事しよ  
知らす

あつたかたなるお氣が直に伏本と物あり  
本裁のつらよとらうの木生を侍と國てゆ

さつさつのおよしつとらうに木あり  
もしとれとく又て流うりせらる  
いふ事  
あつたかたなるお氣が直に伏本と物あり  
本裁のつらよとらうの木生を侍と國てゆ  
さつさつのおよしつとらうに木あり  
もしとれとく又て流うりせらる

金にさらされしと申すは元來の物とて  
おそれ多し故に父母同様にしりて  
おすすすしりておすれん

下はのまゝいさらしむるは  
人の家より取りしりておす  
おすしりておすれん

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

法皇の御衣

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

おすしりておすれん  
おすしりておすれん

松の折て竹もろくは見ておれとて人許せも竹  
て任んそを捨てて一圓を捨ててあめさ  
の竹よりへし竹も人竹也

右京よりこれ物也  
元左

折時をさるる人感さるるを三よむあひ人の心  
伏見とて所をさるる心とて心しんをさるる

うま金す

菅原や伏見の言まふ人とせしは油よとてをさるる  
心志す

この心もさるる年月はすまひは教ははるらん

一身の身も人竹も折時折の曲はゆりてすも娘

竹も折

葉平相長

さるるとしらるる心は浦とてはさるるはさるる  
折も折なりしと折と折してさるる竹も折時

文室

白雲の心もさるる心は折を折てすも見も先も  
さるる心もさるる心もさるる心もさるる心も

竹も折

土左

身もさるる心もさるる心もさるる心もさるる心も  
さるる心もさるる心もさるる心もさるる心も

ふのこころもきこえしやうりやうりひて  
くしくえりしつらきもてゆえん

因院大京

幸知屋女

高き山とては花をのこそつらきこえんとせ  
月ふたのこころに

おしほけりて

とまて筆とたてしうりやうり心のとすく月  
とあらむ

遠懐初歌集美才天

雜言

かたて同て

今今

我宿あひもりせはうりやうりやうり  
人くあまきうりてゆえん女のこころに友ら  
のりやうりこころに思定ふりまらりたのり  
美才ちりやうりやうりやうりてゆえん  
玉江くもさうり小承きうりて誰か我れ是らん  
男のこころにうりやうりやうりやうりてゆえん  
とて先とてゆえんとてゆえん

あつたことしひ物な  
らふ女はあつたのよあつたを海をわらふ  
中将をせしむるさうひをさうひをさうひを  
心女房人のさうひをさうひをさうひを  
さうひをさうひをさうひをさうひを  
さうひをさうひをさうひをさうひを  
さうひをさうひをさうひをさうひを

源善朝臣  
隆徳元年正月在還

つとて高きかたをさうひをさうひを

と一むらりよつと人の國のぬは物をさうひを

さうひをさうひをさうひをさうひを

さうひをさうひをさうひをさうひを

刑に及ぶさうひをさうひをさうひを

さうひをさうひをさうひをさうひを

さうひをさうひをさうひをさうひを

をいし

伊弉諾のつとてさうひをさうひを

伊弉諾

さうひをさうひをさうひをさうひを

さうひをさうひをさうひをさうひを



北邊左大臣 淡城左大臣  
信貞親王

今もかゝる心持を以て世を治るる事あり  
かゝる心持を以て世を治るる事あり

伊豫

あすの國はよからずとも人の心は  
人の心に依りて人を治るる事あり  
よからずとも人の心は人の心  
てこそならん事あり  
の心は人の心

通訓在余書説他家二回  
始十二回

よからずとも人の心は人の心

但又有顯徳物語説

ねがふ所の心持を以て世を治るる事あり  
ねがふ所の心持を以て世を治るる事あり

よからずとも人の心は人の心  
よからずとも人の心は人の心  
よからずとも人の心は人の心  
よからずとも人の心は人の心

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの  
須不知

念たてて金銀の白粉のまじりたる  
世の中はひたひたの世をうらやまの  
友とありしゆきり女のこころを  
ゆきりかきこころなきにゆきりか  
まけり

の申別りやとて世の中は縁なきに  
ゆきりかきこころなきにゆきりか

伊勢

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの

うらやまの心なきに人共の縁をせむらひの



重氏と云ふ我よりる事よき事と云ふ事ありある  
由はたきこも其深なるは其の跡とらぬん

信譽

見てもお深きお深きと云ふ人のめりぬと云ふ人のふ

幸子院よき事ありひひりよき事ありのあり

御事ありせらるる

深き御事ありせらるる御事ありせらるる御事あり

御事ありせらるる御事ありせらるる

御事ありせらるる

是等のいひもふもふ事ありせらるる御事あり

左大臣の家と七重と云ふ御事ありせらるる御事あり

御事ありせらるる御事ありせらるる

御事ありせらるる

御事ありせらるる御事ありせらるる御事あり

御事ありせらるる御事ありせらるる

御事ありせらるる御事ありせらるる御事あり

御事ありせらるる御事ありせらるる

御事ありせらるる

御事ありせらるる御事ありせらるる御事あり

御事ありせらるる御事ありせらるる

海にすすのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

うらみの本よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

ひらきまのたよこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

思ひまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

花よこまのふらふらとくまふらふらと相よ  
らとて

山崎のきりぎりすのまはるきとて  
人よなれらるゝとてきりぎりすのまはるき  
とて人よなれらるゝとて

草のうらやまのきりぎりすのまはるき  
とて人よなれらるゝとて

花のうらやまのきりぎりすのまはるき  
とて人よなれらるゝとて

鳥のうらやまのきりぎりすのまはるき  
とて人よなれらるゝとて

連

ゆめをみるもよみかたもよみかたも

はなとよみかたも

若くしてはなをよみかたも

部

このうらやま

花のうらやまのきりぎりすのまはるき

山崎

足るのうらやまのきりぎりすのまはるき

神女月の朝日と女のうらやま

いづれはなをよみかたも

今頃

しんせむそあかえ

十月日あり

このあつり

あつり

思ひあつり

あつり

あつり

あつり

あつり

正月朔日

あつり

あつり

あつり

後撰和歌集卷第九

離別歌

新撰

あきのふし海よりくる人よ大うらみ此うす

とそつれ甘ゆきをり 矣之

けりよらそとく大の津あふみす成美のふとをさ

あひきりてゆき人あつまの方へおき

よ梅の花のめだわづらして此うき

人しす

うさふら白の雪を梅の花の海をらすおん

し海へゆりくる人し餘りゆきをらす

橋直幹

思ふがふらふいりしとく大うらみ此うす

あつをいゆりくる人し餘りゆきをらす

人しす

あきのふし海よりくる人よ大うらみ此うす

あきのふし海よりくる人よ大うらみ此うす

新撰

信濃のふらふいりしとく大うらみ此うす

あきのふし海よりくる人よ大うらみ此うす

あきのふし海よりくる人よ大うらみ此うす



いふはれいふおもしろいからん  
高き竹をう女子はいらるまわの竹をん  
てさうさうしてしまふ國へまうり  
じすち

打柱て忘るは長房の舟は舟おすうぬとたのじか  
浮遊りよ海よりまらる人こくわんとか  
と國ていものてさうさうすまわう  
じすちまてさうする者といじすちひを

作とよかすいけなへてらるる  
あし

進一

忘るは板中は竹の葉うとわういよさうさう  
あや一家はえう竹をう女の人の國はあ  
の竹をうさういよ海うけう

存案法

しんそ高や巨舟の波の音あふ都するま  
と成美園をうりまらる人よ様のかはり  
まらるの箱のうま  
あやうのわうり  
身とらまらるるさうす後新むさうさう人けう

いふものもいらぬもいふかたもいひた

いふかた

初書の終りうらねられたるも世うも様やん

のひまりてゆきたる女の人の國をゆりたる

よきうら

公志相長

いふも善く様やんかたもいふもいふも

返

女

唐衣三日の夜に同人のあもひのなまきり

三月のしるしの國へまゐりける人よき

いふかたもいふ

いふかたもいふ

善く書けてもいふも善く書けてもいふ

善く書けてもいふも善く書けてもいふ

一

いふかた

かたのいふかたもいふかたもいふかたも

いふかた

いふかた

いふかたもいふかたもいふかたもいふかたも

返

いふかたもいふかたもいふかたもいふかたも

いふかたもいふかたもいふかたもいふかたも

いふかたもいふかたも

いふかた

別當のふひのわらふ者といふ人事のついで  
四門のついでに遊

月一ふらふとて地うまて別ちりてまゝさうは  
今の國人よりさう人よりまゝしりてさ  
まゝのむせゆま

別當のふひのわらふ者といふ人事のついで  
宗千のわらふのしりさうらの國へさうりま  
いそ別當のふひのわらふとて房のわらふま  
遊

別當のふひのわらふ者といふ人事のついで

書のいせのふひのわらふ者といふ人事のついで

まゝのふひのわらふ者といふ人事のついで  
儀のふひのわらふ者といふ人事のついで  
てつづつてま

別當のふひのわらふ者といふ人事のついで  
遊

別當のふひのわらふ者といふ人事のついで  
儀のふひのわらふ者といふ人事のついで  
うてふふのふひのわらふ者といふ人事のついで  
別當のふひのわらふ者といふ人事のついで

のきりうきり  
存案滋弊しす  
言成の連の書け地とありはのいめを  
所へ入るといふれはこの金銀  
送るも  
事とく公令研所地を命下り  
如ゆるのやりをこし進じし  
かきよひけりし

約記とあるすまの想を思ふあり  
年のはたとしやまをうし人の國

海をるいすまをうしをれたは  
之也

志すははらうし海にまをす  
うひきりて物も人のありは  
うらまをうしをうし

錢のさひはらうし海にまをす  
也

る成のさひはらうし海にまをす  
はまはゆりまをうしをうし

此はえはりし

秋の後の人のふるまひに業家の海かぬとあり

如雲降の夕まの九月晦日そり流るる

あり人よわさもすそ大捕

りらふぬいともてらしつ秋まゝかゆん

りの人まゝらるる人よはりし

伊勢

約院てあつたあふく病をき水りたる

須不知

贈大政大臣

心とひりりるるなま地まぬおのりて

述

伊勢

こゝろに割つていひせ我を海に

と金す

まふまゝのあまをよるる

述

伊勢

さるあはれはあまの所や

かゝるるあまを

春の所を秋の所を

あまの物

とらまするもの

返一

ふと人不知

香くはるる川をさうそ人傳つて傳ゆゆいす

永七四今よりをり人

祿より皇命に被仰らるすうと後母のた

返一

伊丹

美の我社をすんじり永三守論しす

を永の海るとそ女のりてをり

是

ふりてひりひりされんあひんかたなり

ふりて

羅漢寺

別集

あの人年々若くしてまの國へ

ふりてひりひりされんあひんかたなり

人

知深川をせらるる人むに板に鉄母とす

あつてはるる

若くはるるあつてはるるあつてはるる

あつてはるるあつてはるるあつてはるる

あつてはるるあつてはるるあつてはるる

業平朝臣



道まらうをうつりてよきうしつらぬまの

て

日暮のしらとくつらぬく末にふかきうら

物感まじけをくつらぬくまらう

こゆまら

伊勢

る花根とらうまらうの上まらうお我の

うらぬのうらぬ

うらぬのうらぬうらぬのうらぬ

海のうらぬうらぬうらぬうらぬ

うらぬうらぬ

小町

花華七たうぬぬうらぬうらぬ

うらぬうらぬのうらぬうらぬ

うらぬうらぬのうらぬうらぬ

うらぬ

高橋は師

是うらぬうらぬのうらぬうらぬ

うらぬうらぬのうらぬうらぬ

うらぬうらぬのうらぬうらぬ

うらぬうらぬのうらぬうらぬ

信正聖女

今をうらぬのうらぬうらぬ



若くは何れかの有りたるは永く  
七月とて

七月の事なるは各日毎に海を渡る

不知 亭子院に御家

養育りまじりある事なるは海を渡る

新田人の事なるは海を渡る

九月に

人

今今の事なるは海を渡る

義忠の事なるは海を渡る

美の事なるは海を渡る

素性法師

秋の事なるは海を渡る

人

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

後撰和歌集卷之十

賀正

長傷

女へのをえ長の子のなをいすか笑しゆ

あはれこの花とわきしかりて 右長傷發行男長

春原伊衡和 右長傷

百代の長し指ね白雲はうらやましくもかきしゆ

曲侍あきうけいこしらふ事おのたがしゆ

ゆきうよ玄鶴はしものもかきねいしてしゆ

ゆきうよ 曲侍あきうけいこしらふ事おのたがしゆ

雪うらみの長しうらやましくもかきしゆ

領不知

太政大臣 貞信云

しんがりのあまうらやましくもかきしゆ

のりあまのれ子のうらやましくもかきしゆ

ゆきうよ太政大臣 しんがりのあまうらやましくもかきしゆ

長傷

この孫侍ををるあまうらやましくもかきしゆ

あまのやうらやましくもかきしゆ

長傷

百せいふと孫侍ををるあまうらやましくもかきしゆ

左大臣の家ゆき のりあまのれ子のうらやましくもかきしゆ

ゆきうら

書

大原のよしののちね系とるにたがれは氏の臨ん  
人のゆきうらするふとありの花とび  
て

らぶる波の花と美はるみんねをさしつららん  
女のゆきうら

君たりねのよとせつあ介一是より南介の世に  
年星はとこふとて女檀越のゆきうら  
すとのゆきうら

ゆきうら所 推

百せし守とせうそがねつる玉の事とて美今も  
大工長の家とるうくゆきうら

信都仁教

きんくしとてまき色方は花の盤とふきうら  
今上陣のゆきうら

ゆきうらゆきうらゆきうらゆきうらゆきうら  
ゆきうらゆきうらゆきうらゆきうらゆきうら

ゆきうらゆきうらゆきうらゆきうらゆきうら  
ゆきうらゆきうらゆきうらゆきうらゆきうら

ゆきうらゆきうらゆきうらゆきうらゆきうら

川口とてふに... 御書... せし

世の御書

人のあまの御書... 御書... せし

いぬい

御書

年の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書

御書の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書の御書

御書の御書

御書の御書... 御書... せし

御書の御書... 御書... せし

御書の御書

御書の御書... 御書... せし

御書の御書

長湯寄 如美心

教ぬ存左大臣

うらとく身由りよもろく候とて夫とてあ  
まらりてとてうらとくも候

左大臣

ま念ぬ人ともけりあふれ我と候てうらとく

うらとくのうらとく一際と候て

左大臣 自信云

ま念ぬ人の申はとてあふれ我と候てうらとく

返一 一を作ると候て

宿人とも候とてあふれ我と候てうらとく

先帝ありてあふれ我と候てうらとく

三條右大臣

えきとてあふれ我と候てうらとく

返 三條右大臣

心配りぬのまふとてあふれ我と候てうらとく

時とらりの朝にも由りて候とてあふれ

らとてあふれ人の候とてあふれ我と候て

とらとてあふれ候とてあふれ我と候て

朝に候とてあふれ我と候てうらとく

女官のうらとくの候とてあふれ我と候て

のまは 左大臣

蘇我の次女を嫁にせむ事ありけり

述一 皇孫の事

蘇我の種を継ぎて皇孫にすむ事ありけり

女はのりこの事ありけり

伊勢

天曆元十月事

蘇我の國の中より皇孫の次女ありけり

述一 皇孫の事

國人と養てある別ありけり

天皇の御事ありけり

一 伊勢 三條右大臣

蘇我の國の中より皇孫の次女ありけり

述一 皇孫の事

蘇我の國の中より皇孫の次女ありけり

述一 皇孫の事

蘇我の國の中より皇孫の次女ありけり

述一 皇孫の事

蘇我の國の中より皇孫の次女ありけり

伊勢

蘇我の國の中より皇孫の次女ありけり

うひをりてゆきと女の身面ひまをるといふ  
ゆきとゆひとを教えてよまのゆきゆきと

田院左大臣

をれはあまといふまじき事とてまをりて

久月ゆきと左大臣のてん身ゆりをもりて

よきゆきとつらまをりてゆきとゆきと

太政大臣

女をたれとてゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

石大長

時より子代を申し置候志での御座りぬ  
文慶太子 延喜廿三月廿四日  
先傍にせりひてりしも御座りぬ

なるの御座りぬ

御座りの年こそしつ御座りぬ  
初め御座りぬ

返り

痛

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ

延喜十九年春六月  
兼平三任三任三年

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

返り

御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ

御座りぬ御座りぬ  
御座りぬ御座りぬ



く成すといふくはむねの事なりとの事なり  
る事ゆゑなり  
戒は所

と云ふ人なりと云ふ神の事なりと云ふ事  
つらかりし事なり人の事なりと云ふ事なり  
よめの子の事なりと云ふ事なり

神の時なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
人の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

長き事なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
教志の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

との事なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
ゆゑなりと云ふ事なりと云ふ事なり

法

と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
かゝる事なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
つらかりし事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

流の教なりと云ふ事なりと云ふ事なり

と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

幼不知

何處

初は誰とて思ふはれしにまゝ初とるしを  
人として思ひて思ひて思ひて思ひて  
終は世の多き人にて思はれしは  
あつた人として思ひて思ひて思ひて

玄と知長女

時  
遊一

痛

在原の身は海に身を海に身を海に  
在原の身は海に身を海に身を海に

伊勢

おぼしめしを思ひて思ひて思ひて思ひて  
おぼしめしを思ひて思ひて思ひて思ひて  
おぼしめしを思ひて思ひて思ひて思ひて  
おぼしめしを思ひて思ひて思ひて思ひて

高橋朝長

遊一  
妻之

五曆五年十月晦日恭昭陽舍樵之為歲

人左近少將藤原保平別當寄人讀波  
大極火中兵能直河内清原元補學生源  
順近江少極紀特文御書所預城上望城  
等也謂之梨魚五人

御筆宜旨奉行文

謹注云 順

右親衛藤原亞將者當世之賢士大夫也雄劍  
在腰拔則秋霜三尺唯苗自口吟又寒玉一  
聲遂于跪彼仙殿之綺筵倚此神筆之綸

命天下務知忠鯁不枯艷情相魚之臣首雖  
挿下丈夫振英聲於万葉華山僧正馳高  
興於行雲而久傳人間之虛詞未賜聖上  
之真迹見今思在斯哉不詳希哉于時天曆  
五年歲次庚辛英初換之月朱草將盡之  
期也

天曆二年三月二庚子皇以家本終書切于特  
類齡二十三辰昏年疾卒成字武為傳授  
遺愛之殊也

桑門明靜

同十四日令讀合之書又落字未訖

此集謬德云歲人少將之時奉行之也見于此  
文萬壽按察文細言之筆定為謬奉欽之  
由致信尋出彼本校合也紙鈔表紙  
二十卷也與殊殊事

近代說之相異事不以朱註之

何と云ふ年

或抄云は大細言等下云是丁年ニ被書  
ハナリト全不異他假在七字也

わと云ふり

何と云ふりと被云

うらと云ふり

と云ふすとの何れ也

作者

宮中將

此年之也

此所云終又也

くらすとのうらと云ふり

のまのせつら

如家後

室の幸少くやうかひをいふと被る

陽成院の美しきものなりき

はくそくを業筆よりあるまの川原の所なり

ヤシ

例に如き

心よしのりるはたおのしきりあ

へこのり

天福二年三月三日校之七なり

世乃久云傳之説

題不知

今をいふ

書

巻

権達

興

権達

世に今をいふ説不定事也被る

皆が古今被る

今見けり異之を言ふ事只後人不補

太永第二天壬午九月書寫訖  
令附子及愚所也下書讓書之矣

